

タヒチ島における初期の文化接触変容

溝 口 靖 夫

南太平洋は近代ヨーロッパ列強の進出に伴い未開諸種族と文明諸民族との間の接触過程に文化人類学又は文化社会学上興味深い現象が見られるのであるが、十九世紀になると、各地域ともその接触はいよいよ複合的となり、一層緊張を加うるに至つた。或る論者は十九世紀の太平洋の歴史を三段階に分けて考へている。第一期は一八〇〇年から一八五〇年までで、これは列強の初期植民開始時代であり、この間一八四〇年二月六日のイギリスによるニュージールランド合併と、一八四三年十一月七日のフランスによるタヒチ島の保護領化とが行われた。第二期は一八五〇年から一八七五年までで、太平洋諸地域の行政問題即ち土着政府の存続可能性の問題がテストされた時代で、この結果列強の植民地合併の傾向はいよいよ明かとなつた時代であり、一八七四年十月十日のイギリスによるフィジー島併合によつて終る。第三期は併合時代であり、この時期に、ドイツとアメリカが植民地獲得戦に参加した。しかして一九〇〇年ドイツの西部サモア領有と一九〇〇年イギリスのトンガ島占有とをもつて終るとしている。われわれはこれに、一八九八年のアメリカによるハワイ合併を加えることが当然であると考へるものであるが、右において、太平洋諸島の植民史上、数個の重要なものが示されていることに気づくのである。

これを南太平洋における列國の生長尖端の交錯複合關係として見る場合、地理的にポリネシアに三つの焦点が考へられる。これらはあたかも三角形を形成するものであるが、一は東のタヒチ島であり、西はニュージールランドでその頂点となるのがハワイである。この三角形の西に隣接するものとしてメラネシアのフィジー島がこれらと最も密接な

関係をもつたのである。私はさきにハワイとニュージールランドにおける文化接触変容について考察する機会があつたので、今般は、上述の重要な数個のエピソードを形成するものの中、特にタヒチについて考察したいのである。⁽²⁾

今タヒチとフィジーとハワイの三者を関連して考えるならば、タヒチにおいては西英仏が、フィジーとハワイにおいては英米仏の三国が関与したのであつて、これはまさに、複合的な文化接触関係であり、複合文化接触変容の現象として観ることが出来る。そして、興味深いことは、タヒチにおいてはフランスが、フィジーにおいてはイギリスが、ハワイにおいてはアメリカが、それぞれ領有を遂げたことである。それにはそれぞれその場合の特殊の事情がはたらいたのである。しかもタヒチにおいても、これがフランスの保護領となる前に半世紀に亘るイギリスとの文化接触がもたれたことに注目しなければならない。しかして、本稿の特に問題とするところは、これら複合文化接触変容の推進力の一つの重要なものとして、キリスト教の布教活動が存したことである。近世世界の植民史上キリスト教の布教がもつた役割は顯著なものである。殊にカトリック教国としてのスペイン、ポルトガル及びフランスの活動においてそうであるが、プロテスタント教を主とするイギリスやアメリカにおいても類型は異なるが同じような関係が見られるのである。以下考察しようとするタヒチの事例は、この植民と布教の關係の特に密接なものの典型的な場合であることを一言したいのである。

タヒチ島は多分一六〇〇年スペインの航海家フェルナンデス・クイロス (Fernández Quiros) により、彼がペルーからフィリピンへの探検の航海途上発見された。一七五七年ウォーリス (Wallis) もこの島を探検し、更に、一七六九年四月十三日にはかのキャプテン・クック (Captain Cook) がここに到達した。⁽³⁾

タヒチ島にキリスト教が伝つたのは、一七七四年のことである。クックの来島におくること数年にして、二名のスペイン人宣教師がペルーから総督によつて派遣されてこの島に着いた。しかしこの最初のスペイン人による伝道に

ついでの詳細いことは明かでない。ただ、島民が宣教師にタイアルプ島ヴァイタペル湾の渚に家をつくつて提供したことが知られている。彼等は十ヶ月間この島に留つたが、そのとき彼等に乗せて来た船が再びタヒチに來たので、それに乗つてペルーのリマに歸つたのである。⁽⁴⁾

その後、一七七七年、キャプテン・クックがこの島に到來したとき、宣教師達が残した家の存するのを認めたという。家は二間に分れていて、それには窓があけてあつた。おそろくそれは、空気が抜きと同時に銃眼としてつくられたものであらうと考えられた。家の前には十字架が建てられており、又、その側に、一七七四年に死去したその船の司令官の墓が残つていた。スペイン人のこの島との文化接觸上記念すべきものとしては、彼等が豚と、山羊と、犬を残したことである。⁽⁵⁾

次に当地の本格的布教は、イギリス人の布教団によつて始められた。この頃イギリスにロンドン外国伝道協会(The London Missionary Society - L. M. S. -)が誕生し、その最初の布教地として太平洋の諸島が指定され、一七九七年この伝道協会に専属するダフ号(The Duff)によつて宣教師の一団が到來したのである。イギリスに於ては、キャプテン・クックの航海以來南海への関心がたかまり、これと同時に、太平洋伝道の熱が現われたのである。当時の交通事情においては、便船を待つての航海では伝道者派遣は暇どるので、伝道事業専用のための船が必要とされたのである。そして、ダフ号がこれに用いられることとなつた。この船による活動が太平洋布教史上において占めた地位は、太平洋探検史上におけるクックの航海にも比肩することのできるものである。

ここで文化接觸上注目すべきことは、ダフ号が準備されたとき、この布教団に、次のような種々なる職業のものが加えられたことである。すなわち、牧師四名、大工六名、靴屋二名、煉瓦工二名、裁縫師二名、鍛冶屋二名、織り手二名、外科医一名、帽子屋一名、小売商一名、製綿業者一名、指物師一名、呉服商一名、馬具つくり一名、ブリキ屋一名、桶屋一名、肉屋一名等が一行の中にいた。これらの人々は大体教会員であり、都合三十名で宣教師団を形成し

たが、この他、夫人六名と男児三名及び伝道の見習生一名がこれと同行した。この様に牧師の他多くの技術家や商人がいたことは、当時のイギリス人の布教法についての考えを示すものである。すなわち、未開地の伝道においては、住民が或る程度文明化されるのであれば伝道は甚だ困難であること、及び、上述の様な技術家や商人を送るのが、ヨーロッパ文明の価値を示すに最適であること等の考えが懷かれたのである。

彼等一行は、一七九六年八月十日午前六時テムス河から出帆した。希望岬を廻つて、翌年三月四日船はタヒチ島沖合に到着した。そこで、前述の四名の牧師を含む十八名の団員がタヒチ島に上陸することとなり、十名はこれより更に遙か西方のフレンドリー諸島中のトンガタブー島に、又、他の二名のはマルケサス島へ行くことにした。翌三月五日の朝には船は海岸に近づいたのであるが、このとき多くのカヌーがやつて来た。

その数はたちまち七十四ばかりが数えられた。多くはダブル・カヌーであり、それぞれ二十名位のをのせていた。彼等はダフ号に近づくと否やその甲板にかけ上り、百名を下らぬものたちが、タヨー、タヨー(tayo or taio 友よ、友よ)と叫びながら踊りはねるのであつた。これはこの種族の間における来訪者歓迎のときの風習であつて、宣教師達にとつて誠に幸であつたと云わねばならない。

過去における島民と白人との交渉に悪い印象がなかつたためであらう。宣教師団の一行はそこで最初の感謝の礼拝を行つた。讚美歌「あめつちこぞりて、かしこみたえよ」(現行讚美歌五三九番)を唱和し、聖書はヨハネの第一の手紙三章二三節の愛の戒めの箇所が読まれた。

ダフ号の来島当時のタヒチの社会状況は、クックが来航した当時の王が年老いて引退し、その子オツ(Otu)といふ自らポマーレ(Pomare)と称するものが位をついでいた。この王はこれより二年前にソサエティ諸島の他の島々を統一し、とくにタヒチ島をも従えていた。これは恰も、ハワイにおいてアメリカ宣教師団の到来前にカメハメハ大王が諸島を統一していたのと同様の状態であつた。文化接上、被接触者側の社会が混乱にあるか統一されているも

のであるかはその経過に大きな差異を招来する。混乱にあるときは、外来文化の地方的な受容又は拒否の現象が現われ、統一された状態では、全面的な受容又は拒否の現象が招来されるを常とする。ハワイのときは比較的容易に全地域がキリスト教化したのであつたが、タヒチの場合には、相当長期の困難な努力の後に、漸くにしてキリスト教が根を下すことに成功した。しかし、タヒチの場合にも王が洗礼を受けるとともに一挙に全島がキリスト教化されるという型を見たのである。これに比してニュージーランドでは、イギリス人の植民後も相当長らく全体が統一されていなかったため、キリスト教の浸透は徐々として行われたのである。

イギリス人の来島に際してタヒチ人と友好関係がもたれたその他の理由としては、この船がもつて来た珍しい文明の器物に住民が心ひかれたためであらうとされている。従来白人達の来島の機会に、彼等はそれを獲ることができたからである。更に好都合であつたのは、この島に、すでに二名のスウェーデン人がいたことである。一人はアンドリュウ・リンド (Andrew Lind) といい、もう一人はピーター・ハッガースタイン (Peter Haggerstein) といつた。前者はマティルダ号という船が難破したときの船員で、一七九二年三月以来この島に住んでいたものであり、後者は何か故あつてダエダルス号のニュー船長によつてこの島に置き去りにされていたものである。これら二人が宣教師達の通訳に当り、又、いろいろ貴重な情報を伝えてくれるのであつた。タヒチ島のマタヴァイ湾 (Matavai Bay) のヴィナス岬と呼ばれるに至つた地点に、これより前から大きな建物が建つていた。これは島民から「イギリスの家」と呼ばれていたもので、ポマーレ王が曾つて来航したバウンティ号のブライ船長 (Captain Bigh) のために建てたものであつた。縦百八十呎横四十八呎、高さ十八呎の大きなものであつたが、これが宣教師の一団に供給され、更に、マタヴァイ全地域が彼等に与えられることとなり、三月十六日正式に譲渡された。但しその譲渡という意味については、それが単に社交上の一形式であつたか、真に与えてしまつたのであるか確かなことは解らないが、ともかくポマーレ王が宣教師の一団に最も友好的であつたことは真実であるらしい。ダフ号の大多数のものがタヒチに落着

いて、三月二十六日、この船は更にフレンドリー諸島へ向け航海を続けた。

ダフ号が去つて後も、島民の宣教師に対する好意は変らなかつた。その理由はやはり、宣教師が齎らした珍らしき道具、たとえば、ナイフ、はさみ、斧その他のためであり、又彼等が示した不思議な技術のためであつたものと考えられている。一行中の大工は森林から大木を伐り倒して船をつくつた。長さ二十呎、六十噸の小船ではあつたが、土人の目には驚異として反映した。彼等の経験によれば、丸木から沢山の長い板をつくることだけでも思いもよらぬことであつたからである。さらに技術師が真赤に焼けた鉄を火花を散らしながら打ち伸ばし、又はたたき屈げなどして種々の道具をつくるのを見たのははじめてであつたからである。彼等は或るオランダ船が一七二二年に難破したときその船からとつた鉄器をもつていたのであるが、いまそのつくり方を目のあたりに見ることができて、その興味は非常なものであつた。

しかし布教の方面では最初予期した成果が容易に見られなかつた。それにはいろいろな理由が考えられるが、先ず言語の不便である。前述の二人のスウェーデン人の通訳により説教がなされたけれども、これら二人は教養なく、とうてい宣教師の教えを十分に伝えるほどのことは期待できない事情にあつたのである。そこで、宣教師達は、自分でタヒチ語の習得につとめた。しかしながら、宣教師達の苦心は想像以上であつた。彼等の日記によれば、次の様な困難が書き記されている。たとえば、一七九九年四月九日のところに、(一)、住民の言葉は非常に早口であるので、これを綴りに書き表わすのに骨が折れる。(二)、一つの言葉に種々の意味があるので、それを理解するのが容易でない。時としては同一の言葉がまるで反対の意味に使われることさえある。(三)、更に、言葉を簡約して全体を云わないことが多いので、しばしば新しい言葉と間違えることがある。この様な困難にも拘らず、宣教師達はよく住民の言葉を学び、これをアルファベットの綴りで書くことを工夫したのである。この仕事は近代における未開種族の言語研究と取組んだ先駆的なものであり、又、ポリネシア語が文字によつて表わされた最初のものであつて、この事業によつて、

東部ポリネシア全体の言語が文明の世界に向つて道を開けたことを意味した。

伝道の困難であつた他の理由は、当地の道徳がはなだ低劣であつたことである。この頃はまだシドニーやイギリスとの定期航路はなく、ただ時に捕鯨船が来る位であつたので、イギリス本国からの最初の手紙は一七九八年八月四日に受け取られたほどである。この島にはすでに捕鯨船の船員や白人の逃亡囚人達によつて性病が伝染されており、これに悩まされている住民も少くなかつた。又、酩酊、性的乱行等の悪弊も他の島と変りなかつた。又島民には盜癖があり、これにも悩まされた。しかし、最悪のものは嬰兒殺しや人身御供の風習であつた。これも単に未開種族だけでなく、往昔は世界の他の国々でも見受けられたところであるが、タヒチにおいては、それらは宗教的な意味をもつていたものと思われている。タヒチ島の古くからの社会制度は一種の神権的な封建制であつたようであるが、その封建制の上層に支配的集団としてアレオイ社 (Areoi Society) が存在した。これは一種の宗教的政治的統治権を一手に収めたものである。その起源についての伝説はゴーガン (Gauguin) のタヒチ紀行ともいふべきかの『ノア・ノア』の中に書き記されているが、この結社の実力は白人渡来後も尚強く維持されたのである。宣教師渡来当時も王族をはじめこれの会員となつていて、古い島の風習行事については彼等の指導は島民に絶対的な拘束力行使したのである。アレオイ社の命ずる風習の中で一番問題となつたのは人身御供と嬰兒殺しである。ゴーガンによれば、「アレオイは人身御供が神々に喜ばれる事を教えた。そしてマレエ (寺) に於て、長男を除く外の子供は全部犠牲に供する事にしてゐた」と記されている。即ち、人身御供と嬰兒殺しとは密接な関係にあるわけであり、ゴーガンの理解するところでは、これは原始諸種族における人口調節の一つの方法であつたものとされている。「こうした、他の多くの原始民族も従わねばならなかつた野蠻な義務は、深刻な社会的原因並びに一般的利害關係の原因を持つていたに違いない。昔のマオリイ種族の如く、非常に繁殖力の強い種族にあつては人口の無限な増加が非常な危険を齎らした。勿論人々の生活は安易であり、其処に衣食の道を見出す為には、各人にとつて多くの生産品は必要ではなかつた。然

し、自然的に制限され、乗り越すことの出来ない広大な海に囲まれた地域は、無限に増加する人々の足に依つて、次第に侵されて行く事になつた。⁽⁹⁾「更に人口問題に必然的に伴うのは食糧問題であるが、人肉嗜食はこの問題の処理の一方策として、未開種族の間で行われたものと見られている。

太平洋諸種族の間には白人の到来当時未だ食人の風習の残存したところが多いのであるが、タヒチでは既にこれは見られなかつたようである。ゴーガンは更に続けて云つてゐる。「大人の殺戮を免れる為に、彼等は、小兒殺戮に忍び出したのである。然し、恐らく彼等は、既に人間嗜食に恐怖を感じてゐたに違ひない。而かも確かに、アレオイ人にとつては、この点に於ける国民的習慣を変える為には、異常な力が必要であつた。彼等は、宗教的威厳と、彼等がその尊ぶべき後継者となつてゐた最古の伝統の力とを民衆に押し付けることによる外、其の目的を達することが出来なかつた。⁽¹⁰⁾」この様な強力な種族的慣習に対して、何等かの変化を与えることは、容易なことではなかつた。宣教師達が先ず心を痛めたのは、この嬰兒殺しと人身御供の風習であつた。王妃自身このアレオイ社のメンバーであつたので自分の生んだ子を殺したことがあつた。宣教師達は、一七九七年十一月九、十、十一日の三日間、宣教の諸問題について協議した。⁽¹¹⁾そこで決つたのは、嬰兒殺しの風習についてであつた。これをやめさせるのは自分達の義務であると強く決意するところがあつた。

この会議でとり上げられたもう一つの問題は、彼等の住宅が若し住民によつて襲われたときは、どうすればよいかというのであつた。結局、宣教師達は、婦人や子供らを守るためには、フォースを用いても止むを得ないものと見解に一致した。

この頃宣教師の間でもう一つの問題が起つた。ルウィス (Lewis) と云う宣教師が土着の娘と結婚してもよいかというのであつた。宣教師達は慎重にこれ考えたが一同賛同できなかつた。その理由は、これが一宣教師と改宗した島の一婦人との問題としてではなく、この婦人がまだキリスト教を信ずるに至らず、且つまた住民の未開諸風習か

ら脱却していないというにあつた。⁽¹³⁾結局ルウイスはこの婦人と結婚したので、宣教師団から離れて暮すことになつたのである。これが一七九八年夏のことであつたが、不幸なことには、その翌年十一月末にルウイスは住民により殺された。多分ルウイスの妻の親族のものが、ルウイスの財産をねらつて、この結果になつたものと思われている。⁽¹⁴⁾

宣教師の問題となつたものに銃器と弾薬の供給がある。最初から宣教師達は島民への武器輸入に反対した。それは島民に不幸を齎すものと考えられたからであらう。ニュージールランドでもハワイでも同じ問題が起つたが、宣教師団は大抵いつもこれに反対している。これを輸入するのは、きまつて島に出入りする船舶の乗組員達であつた。島に往来する白人の旅人にとつては大なる問題ではなかつたであらうが、いつも島に住う白人にとつては、住民が銃器を手に入れるということは、治安上も容易ならぬことであつた。又、白人の優越なる地位を確保するためにも、住民に銃器を与えることは賢明とは考えられないことであつた。しかし何よりも憂慮されたのは、住民同志の争闘にこの優秀な武器が使われることが、彼等を自滅に導くであらうと考えられたことである。事実、ニュージールランドでは白人のもたらした銃器によつて、その人口の多くのものを失つたのである。これ、ニュージールランドがまだ誰か強力な酋長又は王によつて統一されていなかったからである。タヒチ島においては、宣教師渡来二年前に全諸島はボマーレにより統一されていたとは云え、尚お酋長間の擾乱は絶えなかつた。このことは宣教師達の心をいためたのである。又これは伝道の妨げともなつたのであつた。この様な事情にあつて、一七九八年三月ナウチルス号 (The Nautilus) が来航したのであるが、宣教師達は、鉄砲と火薬の供給に反対し、又、乗組員の不道徳をも糾弾したのである。しかし島に往来する船舶からの武器の供給はその後も引続き問題となつた。一八〇〇年一月エリザ号 (The Eliza) が来島したが、このときもこの船の乗組員が武器を与えている。

最初宣教師は、この様に銃器火薬の供給に反対していたのであるが、その後必ずしも嚴重にこれが守られたわけで

なく、特に、ボマーレ王の懇請もあれば、これは無下にもしりぞけ難い事情にあつたのであろう。たとえば、次の書翰はこのことを暗示しているようである。これはニューサウスウェールズの総督キングからタヒチの宣教師に宛てたものである。

「ボマーレ王に代つてゼファソン牧師から発せられた書面によれば、同師は若干の銃器を要求し来られた。若しこの要求を全然拒否するにおいては、われらの求むる物資の供給を妨ぐる結果となることは明かであるから、手許にある小銃のうち、最上のもの六挺をお送りする次第である。」
と云い、更に続けて

「この銃器が彼等に悪しき結果を招かざる様特に希望する次第である。若しこの経験が成功すれば、彼等と友好關係を継続することはわれらの望むところであるから、貴下がボマーレその他諸方面に対して、豚の増産に対し一層の努力をなされること、及びその産額に比例してわれらの銃器彈藥の給与も行わるべきことを伝達されるよう切望するものである。」

と述べている。これは一八〇一年六月二十五日タヒチ島に到来のイギリス軍艦ボーボイズ号 (The Porpoise) に托されたものであつた。

かくて、ボマーレ二世の宣教師達に対する諸物資の要求はその後も続けられたのであり、一八〇七年一月一日附の書翰にもこのことが記されている。

「(前略) 友よ、私は各位に御健康と御清栄とを祈ります。又、われら凡ての上にもエホバの恵と救がありますように。(中略) 友よ、私は貴方が私の求をきかれることをお願いします。すなわちもつと多くの男子、女子、子供らを送られますように。友よ、われらがイギリスの風習になずむことのできるように、物資や衣類等を送りたい。友よ、われらに充分の銃器と彈藥とを送りたい。この国では戦争の絶間がないから。若し私が殺されるな

らば、貴方がたはタヒチの凡てを失うであります。私が死んだ後に来られないように。タヒチは願られない国であります。若し私が病で死ぬことでもあれば、もう来られるには及びません。私はこのことをお願いします。私に何でもイギリスの珍しいものを送つて戴きたい。又、私に字を書くに必要なあらゆるもの―紙でも、インキでも、ペンでも―何でも沢山送つて戴きたい。字を書く道具が不足しないようにお願いします。⁽¹⁷⁾ (下略)

というのであつた。

タヒチ島にて　ボマーレ

宣教師達による島民教化の困難として住民の懶惰が挙げられている。しかし勤勉といい、怠惰といい、相対的なものであつて、島民自身にとつては殊更問題と考えられるものではなかつたであろうが、何分未開の状態にあつたものが文明世界との突如たる接触到曝されたのであるから、文明人から見ても怠惰であると見られたのも、もつともであらう。それはともあれ、島民は斧や鋸^{のこぎり}や鉋^{かん}などの多くの道具を与えられて、いとも、なかなかその住居やカヌー等を改良しようとはしなかつた。彼等に文明の有用なる技術を教えることは甚だ困難であると思われた。まして、彼等に文字を教え、彼等に近代的な教育を施すことは至難なことと考えられた。⁽¹⁸⁾ そこでイギリス人は太平洋で布教が始められる前には、文明の技術を授けることが伝道の第一の道程であると考えたのであるが、宣教師達による現実の伝道経験によると、それとは反対に、未開人達は、キリスト教の福音の力が彼等に影響を与えるまでは、未開人に文明を理解させることはできないと考えられるに至つたのである。⁽¹⁹⁾

一八〇三年九月三日ボマーレ第一世が急逝した。彼はその時の王ボマーレ第二世―オツ (Otu)―の父であり、享年五十乃至六十と考えられた。ヨーロッパ人との接触が始まるまではタヒチのオパレ地方の酋長に過ぎなかつたが、バウンティ号の反乱者がこの島に来たとき彼等の助けをかりて、次第に勢力を増し、遂にタヒチと隣接するエイメオ島^{アイモエ}の全領域を支配することができたのである。彼は反対者に対しては断乎たる態度をもつて臨んだが、性来平和を愛し

又、家やカヌーをつくるのを好んだ。又、ヨーロッパ人の實力をよく知っており、彼等が持つて来る文明の器具を理解する力をもつていた。彼のこの白人に対する平和的な態度が、ダフ号の到来に際して宣教師に幸いしたのであった。彼は常に宣教師に対して友好的であつたが、それは彼のキリスト教に対する信仰からではなく、むしろ、彼の功利的な動機からであり、彼の愛したのはイギリス人のもたらした文明の利器であつたものと考えられている。彼は生涯ポリネシアの固有の宗教に最も熱心であつたとみなされているのである。¹⁹⁾しかし、ともかく、彼は宣教師の忠告に従つて、ダフ号到来の一七九七年三月から一月後に早くも、人身御供を禁ずべきことを誓つている。²⁰⁾その後一年目の一七九八年三月、宣教師達はナウティルス号の船長に銃器、火薬を島に供給しない様に忠告したことからポマーレの子であるオツの気嫌をそこね、かかる折柄、三人の宣教師がオツを訪問しての帰途、これらの宣教師は住民によつて襲撃され、裸にされ打たれたのである。これは宣教師団に衝撃を与え、彼等は三月二十七日会議を開き、これ以上タヒチ島に留まることができかどうかを議したのである。そして、この月末の三十一日には、最初上陸した宣教師十八名のうち僅かに七名がこのタヒチ島に留まることを決心したのであつた。しかもこの時、ポマーレ一世は、宣教師達が全部タヒチ島を引揚げ²¹⁾ることを憂慮したのであらう。宣教師に暴行を加えた住民を処罰し、十五名のものが処刑された。

一八〇三年にポマーレが逝去したとき、その子によつて引継がれ、ポマーレ二世と称された。彼も亦、父と同じく宣教師に好意的であり、彼の治世にキリスト教がタヒチに深く根を下ろすことができたのである。

ポマーレ二世は、殊に文字に興味をもつていた。彼は宣教師に住民に文字を教える必要なきこと、王自身のみ教えられたきことを注文したのであるが、これはもちろんきかれず、一般人民にも教えられた。しかし、王の熱意は、彼の文字の勉強を誰よりも速かに進歩せしめたのである。

この頃宣教師のタヒチ語のアルファベットでの編さん事業が始められており、彼等は一八〇六年三月以来、毎週二

回ずつ集つて、これを進めたのである。そして、一年後の一八〇七年四月には約二一〇〇語が記録され、更に五千乃至六千語が語集の目標とされたのである。⁽²⁵⁾これに伴い、印刷の必要が痛感されていたが、一八一七年二月十三日、ウィリアム・エリス (William Ellis) がエイメオ島に到来し印刷機を持つて来た。これはタヒチの布教活動に一時期を劃したものであり、その年の六月三十日、この島における最初の書物の第一頁が印刷されたのである。これ以来、先ずタヒチの語録が二六〇〇部出版され、ついで、タヒチ語の教義問答が二三〇〇部出版された。これと同時に、ノート (Henry Note) がルカによる福音書を翻譯し、これは翌一八一八年出版された。その最初に製本されたものはノートに送られ第二番目のものはボマーレに献げられた。それから、王妃と酋長達に、さらに、一般人民に販売された。聖書は椰子油と交換された。⁽²⁶⁾ルカの福音書について、讚美歌が出され、かくて、聖書の翻譯及び出版事業は継続され、一八三〇年には全新約聖書が、又、五年後には全旧新約聖書が完成、出版されたのである。⁽²⁷⁾

この間、ボマーレ二世は、一八〇八年、内乱のため敗れて、タヒチ島から、エイメオ島に逃亡した。しかるに、これがタヒチ島の布教に好転の機会となつたのである。宣教師ノートは王ボマーレ二世とともに、エイメオ島に住むこととなつたのである。王は以前からタヒチの固有宗教及び慣習に熱心であり、あまりキリスト教には熱がなかつたが、内乱の結果、彼の父祖伝来の宗教に疑問を懷くに至つた。かくて、漸次ノットの影響によりキリスト教の信仰に傾いたのである。王は一八一二年はじめてノートに向つて洗礼を受けたい意志のあることを申し出た。しかし、このときはまだ宣教師から受け容れられなかつた。⁽²⁸⁾しかるに一八一五年ボマーレ二世は再び政權を回復してタヒチ島に帰ることができたのであるが、時機熟して一八一九年五月十六日の聖日に洗礼を受けた。⁽²⁹⁾これにつづいて、タヒチ島とエイメオ島の大多数の酋長を含む住民が洗礼を受けた。これより少し前、王はタヒチ島のパパオアに教会堂を建築した。これはローヤル・ミッシヨン・チャペルと名付けられ、縦七二呎、横五四呎の大きなものであつた。一八一九年五月十四日受洗の二日前には新しい法律を發布したのである。その内容は殺人、盗み、聖日を守らぬこと、謀叛、

姦淫、裁判のこと等十八条より成るものであった。^(註)

ポマーレ二世は洗礼を受け、国内のキリスト教化に尽したのであるが、他面、飲酒の性癖が止まず、宣教師から憎まれた。

一八二〇年夏前に、ポマーレ二世に嗣子が誕生したが、その翌一八二一年十二月七日ポマーレ二世は病死した。「ただイエスのみ」(Jesus alone)というのが彼の最後の言葉であった。

彼が逝去したので、幼児がポマーレ三世として即位した。しかるに彼は一八二七年一月十一日に短い生涯を終つたのである。

ポマーレ三世の歿後、王妃アイマタ (Aimata) がポマーレ四世となり、統治することとなつたのであるが、この治世中、タヒチは、新たにフランスとの困難な折衝をもつに至つたのである。そしてそのはじめは、フランス人宣教師の渡来であつた。

さてタヒチ島におけるカトリック教の伝道については、既述のごとく、スペインによるものが最も初期のものであるが、フランスのカトリックの伝道は、一八三六年に始つてゐる。この年十一月二十一日にラバール (Laval) とカレ (Carlet) というピクプス (Picpus) 会の宣教師が来島した。この二人は、これよりさき、ガンビール島に数ヶ月滞在し、この間タヒチ語を覚え、渡来したものである。しかるに、この時ポマーレ女王の顧問としてブリッチャード (Pritchard) というものが活躍していた。彼は一八二四年ロンドン伝道協会の宣教師として来島し、一八三七年にはイギリス領事に任命され、同伝道協会と正式の關係を絶つよう命ぜられた後も、同会とは独立に自由伝道を行い、その後永らく同島の政治折衝の任に當つた重要人物である。その子ブリッチャードは、フィジー島で同じくイギリスのために活躍するのであるが、父子ともに南太平洋において、重要な政治的活動をなしたことは記憶に値するものである。

今プリッツチャード等の指導の下に、来島した二人のカトリックの宣教師は上陸を拒まれ、島から追放されたのである。しかるにその翌年一月二十七日、これら二名の宣教師がアメリカ船コロンボ号に乗つて再びタヒチ島に現われた。しかるに彼等は再度上陸を拒否されたので、彼等はやむなくその船でヴァルパライソに向つた。その中の一人であるカレーはヨーロッパに帰り、ことの次第を伝えたので、これはフランス政府の問題とするところとなつた。その結果、一八三八年八月三十日、フランス軍艦ヴィーナス号がデュペティ・トッアル (Du Petit-Thouars) 艦長指揮の下に来島した。そして艦長は、同日、ポマーレ女王に対し、謝罪状を提出すべきこと、二人の宣教師に対する暴行の賠償金を支払ふこと、及び、フランスの国旗を掲げ、これに礼砲を發して敬意を払ふべきこと等の要求を出したのである。女王はフランス軍艦の前やむなくこれに従う他なかつた。しかしてこれに引続き、フランスとタヒチとの間に条約が結ばれ、フランス人は職業の如何を問はず、タヒチ島に往来し、この地に居住することを許されることが決つた。プリッツチャードはこれに反対し、女王を動かして、イギリスの保護を求むる書翰を發せしめた。しかるに、イギリス政府は、この頃、タヒチ島の内政に干渉することを好まなかつた。何故なれば、当時イギリスは、ニュージールランドに政治的関心を強くもつていたのであるが、国民の輿論は未だ植民地併合の政策に全幅的な一致を見なかつたからである。そこで、パーマーストーンはポマーレ女王の申出を考慮することを拒絶した。これタヒチにおけるイギリス宣教師の熱心なる活動にも拘らず、この国がイギリスから離れ行く契機をなしたものであると考えられているが、又、他の理由としては、プリッツチャードのこの强硬政策が、タヒチ住民の反感を買い、住民は却つてポマーレ女王に強いてフランスに頼るべきことを要求したのであるとされている。⁽²⁹⁾

かくてタヒチ島は一八四三年フランスの保護領となつたのである。それとともにカトリック教の勢力が増大し、プロテスタント教会には種々の制限が設けられた。そして遂に一八八〇年タヒチはフランス領となり、一八八六年ロンドン伝道協会は正式にタヒチから撤去することとなつた。しかしその後も島民の中にはプロテスタンティズムを信奉

するものが全体の約五分三を占める有様であつたので、フランスのプロテスタント宣教師が福音伝道協会 (Société des Missions Évangéliques) から送られて、イギリスのロンドン伝道協会に代ることとなつたのである。

註

- ① K. L. P. Martin, *Missionaries and Annexation in the Pacific*, Oxford, 1924, pp. 9—10.
- ② 拙著『宗教社会学研究』関書院、昭和二十八年、第二篇。及び「マオリ族における初期の文化接触変容」(神戸女学院大学論集、第三卷一、二合併号)
- ③ *Catholic Encyclopedia*, Vol. 14, p. 430.
- ④ C. H. Robinson, *History of the Christian Missions*, N. Y., 1923, p. 447.
- ⑤ Ellis, *Polynesian Researches*, Vol. II, p. 6.
- ⑥ Richard Lovett, *The History of the London Missionary Society*, London, 1899, Vol. I, p. 127; Robinson, op. cit., p. 448.
- ⑦ Ellis, op. cit., Vol. II, pp. 8-9.
- ⑧ Lovett, op. cit., pp. 162-3.
- ⑨ Ellis, op. cit., p. 19.
- ⑩ キーガン著、前川堅一訳『ノア・ノア』岩波、昭和七年、九三頁。
- ⑪ 同書、九三—九四頁。
- ⑫ Lovett, op. cit., p. 148.
- ⑬ Ibid., pp. 156-157.
- ⑭ Ibid., p. 164.
- ⑮ Martin, op. cit., p. 14.
- ⑯ Lovett, op. cit., p. 189.

- ①⑦ Ibid., p. 161.
- ①⑧ Ibid., p. 161.
- ①⑨ Ibid., p. 181.
- ②⑤ Ibid., p. 134.
- ②⑥ Ibid., pp. 150-151, 155.
- ②⑦ Ibid., pp. 184-185.
- ②⑧ Ibid., pp. 214-217.
- ②⑨ E. M. Bliss, *Encyclopedia of Missions*, N.Y., 1891, Vol. II, p. 380.
- ③⑤ Lovett, *op. cit.*, p. 190.
- ③⑥ Ibid., p. 219-223.
- ③⑦ Ibid., p. 222.
- ③⑧ W. T. Pritchard, *Polynesian Reminiscence*, London, 1866, chap. I.
- ③⑨ *Encyclopedia Britanica*, 14 ed., Vol. 21, p. 755.

Mizoguchi, Yasuo

The Early Stage of Acculturation in Tahiti.

Rèsumè

The Eastern Pacific, where the savage people were civilized within the last two centuries, is a very interesting place for the study of acculturation. The main force for this acculturation is Christian missions.

This is a study of the relationship between the sociocultural process and Christian evangelization in Tahiti.

The period which was treated is mostly the early part of the history of the intercultural contact when the London Missionary Society made very energetic activities for the propagation of the Gospel.